

コメント3

輪島 裕介

大阪大学大学院文学研究科准教授

まずは自分の話から始めようと思います。そのことは、おそらくフロアのみなさんと、今日お話しくださった二人のプロフェッサーのあいだをつなぐ仕事になるかもしれないと期待しています。

現実のアフリカと関係が強まるなかで ブラジルのアフリカ性はどうか再定義されるか

自分の話とは違うことで、今日お話ししようと考えていたことはあったのですが、それはサコ先生の話で言い尽くされています。ごく簡単に申しますと、アフロ・ブラジル文化における身体的な記憶のなかで継承されたアフリカ性というものが、現代において現実のアフリカとの関わりが出てきているときに、どのように変容しうるのであるかをお尋ねしたかったのです。

アフリカにおけるカポエイラを受容のコンテキストをサコ先生に見事にお話しいただいたので、もう一つの質問として、現実のアフリカとの関係が強まっているなかで、カポエイラにおける、またはアフロ・ブラジル文化あるいはアフロ・バイーア文化におけるアフリカ性が、どのように再構築されるのか、再定義されるのか、お尋ねしてみたいというのが一つです。

異文化に属しつつ他者の文化を担う存在と それがブラジル性、バイーア性に与える影響

次の話と関連しますが、まずは自分の話から入ります。私は今日はイレ・アイエのTシャツを着てきました。最初に部屋に入ったときに、パウラ・バハット師範が「イレ・アイエ」と反応してくださったので安心しました。先ほどの講演でもイレ・アイエの話が、アフロ・ブラジル文化の現代的な側面として出ていました。

私はいまを去ること20年ほど前、大学時代からしばらくのあいだ、バイーア音楽に骨の髄まではまり込んでいたのです。それが嵩じて大学院で音楽研究を始めました。修士論文まではブラジルのことについて書いたのですが、博士課程に入ってフィールド調査をする

ときに、そこである種の壁にぶつかって、そこから日本の大衆音楽の研究に方向転換したのです。

それはどういうことか、いまの立場から煎じ詰めて言うと、他者の文化にはまり込む、耽溺する、あるいはそれを研究しようとするということは、結局なんなのかという話です。それはおそらく日本でカポエイラ・アンゴラを実践しているみなさんにとっては日常的な問題なのかもしれないし、むしろそんなことはとりあえずいったんカッコに入れて、とにかくやるという関わり方をされているのかもしれない。

講演では「アフロ・ブラジル文化は、リアル・ブラジリアン・カルチャーだ」という話がありましたが、それが日本やヨーロッパ、アメリカ、アフリカで実践されるときに、そこでのアフリカ性やブラジル性あるいはバイーア性といったものが、どのように変化するか。

とくにそれが異文化に属するとされる人たちによって担われる。そして、おそらく現在のバイーアのアフロ・ブラジル文化を考えるなかでも、そういうブラジルやバイーア以外の世界からある種の巡礼のようなかたちでやってくるツーリストとは言い切れないような熱心な参加者たちが、いまや現実のアフロ・ブラジル文化の重要な構成要素であることは間違いないわけです。

であるならば、そのときに、アフリカやブラジルの内実がどのように変化していくのか。そしてそれを実践する日本人というのはなんなのかということです。この最後の問いについては、むしろフロアのみなさんのお考えをうかがいたいところです。

やや挑発的な、論争的な言い方に聞こえるかもしれませんが、現在起こっていることは、アフロ・ブラジル文化、アフロ・バイーア文化のかなり中心的な特徴である抵抗、解放という契機が、皮肉な言い方をすれば、かつて抑圧者であった人たちによって実践されている状況にあるとも言えるわけです。それは簡単に抵抗・抑圧と分けられるものでは当然ないわけですが、その

なかで、アフロ・ブラジル文化の身体的な記憶のなかで伝承されてきた抵抗という契機は、どのように再定義されるのだろうかということも考えます。

さらに複雑なのは、日本でそれを実践することになった場合、コロニアルな関係のなかにおける支配・被支配とは別の、ある種の人種的な秩序のなかにアジア人とアフロ・ブラジル系の人びとというのは属すると考えることもできると思います。そこで日本でカポエイラ・アンゴラが実践されるときに、アフロ・ブラジル文化、アフロ・バイア文化にどんな変化が起きているのか。それは日本の文化的な状況のなかで、どのような位置づけになるのか。なんらかの変化をもたらす契機になり得るのかということを考えています。

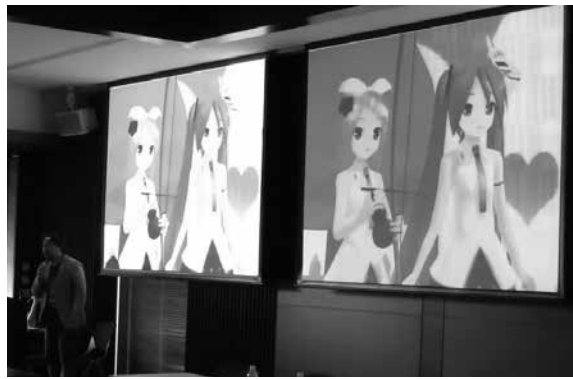
他者の文化を身体的に実践するとは どのようなことなのか

「日本人がなぜブラジルの音楽を好きになって、研究しようとするんだ」と、現地にいるといやほど聞かれますが、うまく答えられないのです。「好きだから好きだ」というのは、研究者としては答えにならない。それをどう考えるかというときに、なぜ自分は他者の音楽、異文化に魅惑されるのかという視点から、日本での外来音楽の受容の歴史や、そのなかで日本らしさが再定義されるプロセスなどを手始めに考えてみようと思っていたら、10年ぐらいたってしまったわけです。

その成果として、演歌という音楽ジャンルについての本を書きました。この中身の話をしはじめるときりがないですが、ここでも、もともとは他者の文化であった、異文化であったかもしれないものが、さまざまな過程のなかでいろいろなかたちで意味づけられていて、とくに被抑圧的なポジションにある人たちの「抵抗」としての意味を与えられ、そのことが、音楽文化のなかで真正性を獲得する一つの重要なきっかけになったという話を展開しています。

そういう過程は、たとえばサンバであったり、キューバであればソンであったり、アルゼンチンであればタンゴであったり、そういうものとかかなり共通している部分があります。そこでまた一つつながったかなということを感じました。

先ほど宇野先生がアイデンティティの擁護ではないマイノリティ哲学という話をしましたが、他者の文化としてのなにかを身体的に実践するということは何なのだろうかという、とうてい答えが出るはずのない問いですが、そのことをお尋ねしたいと思います。



資料5-1 カポエイラの歌を演奏するアニメ

自文化とは、異文化とはなにか それが変容する現場ではなにが起こるのか

コメントですので、私自身が答えをもっているわけではありません。ですから、ここまでの話と関係があるのかなのか微妙ですが、この話をするにあたって、最近見つけた例を見ていただきたいと思います。

資料5-1のような状況では、なにが起きているんだろうか。当然笑いが出ることは想像していましたが、じゃあこれはアフロ・ブラジル文化の搾取なのだろうか。これをカポエイラを実際に行っている人たちはどう見るのだろうか。とくに日本でやっている人たちはどう見るのだろうかということも、ちょっと聞いてみたいと思います。

これはジョークのようにしか見えないかもしれませんが、ここでなにが起きているかを考えることは、じつは自文化と異文化とはそもそもなんなのか、とくにそれが現代のポピュラー・カルチャーの文脈のなかで変容するときにはなにが起きているのかを考えるうえで、かなり複雑なかつ本質的な問題提起を含んでいるのかもしれないと考えています。

これは無理やりつけた理屈というところもあって、やはりこの見た目のインパクトに私自身も衝撃を受けました。ということで、話を開いたかたちで終わりたいと思います。

